生命誌の広場

テーマ別に投稿を読む
中村桂子の「ちょっと一言」
研究について
季刊「生命誌」
展示・映像
その他

あなたの考えをお聞かせください
ご意見はこちらから

みなさんからのご意見

季刊「生命誌」

その時、具現したもの

投稿日：2014.10.30 **ニックネーム：**hon no mushi

読書週間で『ヤマト少数民族文化論』をめくっていて、前の西田幾多郎さんの本にも通ずるような表現があり、私の想像かたがたお伝えします

…アニミズム的な神話世界で生きる人たちは、一般に生存のための実用性を優先させるのである。もともと苛酷な条件のもとでの生存という、宿命的でだれにも変更できない現実が前提としてあり、そのうえで、さしあたってのその説明の物語として神話が生み出される。したがって…どこかに、神話は生存のための“必要悪”だというくらいの感覚を潜ませている。神話世界のリアリティーは、主として生存の現実のほうが支えているのであって、神話の物語は、その生存の現実と矛盾しない範囲において、自由な想像力の羽ばたきを許している…

私は旅は行った先々の風土やら食べ物やらが感じられればいい…ぐらいに考えており、どれ位の潤い（水気）と土の香りが感ぜられて、空気というか雰囲気がどうなっていたか（「風」の流れ）など…そして日常の生活を感じられれば…

（引用に戻り）…現在の「日本国憲法」が天皇を「象徴」としたことで、国家段階の政治からの分離は事実上実現している…しかし…その根源部分…経済状態が極度に悪化し、日本の関係する国際情勢もなにかの事情で険悪になってきたりしたら、“無尽蔵の空虚”として放置されたこの部分の潜在的エネルギーが、今度はどのような形をとって噴出してくるのか…

平泉光堂の話を出しましたが、あそこであの時起こったことは、日常の風景よりずっと際立った凄惨なものだったはず（戦争の決着の場になっていたので）…そしてそこには、人を殺傷する鉄（かね）の要素と火の要素が顕現していた…
それは、西田先生も述べたような<空虚>が、クラインの壺のように内側と外側が裏表一体で決して「中心が無い」形に、人の血肉（ミトコンドリアの熱（火）と赤血球や神経他に在する鉄）をまとって顕在化したのでは…

その他

古き町のおもかげ

投稿日：2014.10.28 **ニックネーム：**hon no mushi

…岩波現代文庫の『西田幾多郎の憂鬱』を解説まで読み終わり、忘れられた怨念のようなものが憑りついたようで？、胸が熱くなりました。思想書や哲学書関連はとても苦手で食わず嫌いだったのですが、西田先生の著作は面白そうだと感じました…そして、哲学者廣松渉という人の名は確か…中島義道さんの本で目にして以来、その人の本はいずれ機会があったらかじってみたい、と胸の奥にしまっていたのだった…
と、いろいろ澎湃と湧き起こるものがありますが、そんな中混乱に乗じて出てきた、情けないほど他愛ないものを…僭越ながらお伝え致します…

…アイゼナハの町を広場から登っていくと、確かルターシュトゥーベという部屋のある山城があって、私が寄った時は観光客が沢山いたので、次に来る機会が

最新のお返事
2019年10月02日
RE:アゲハの気持ち
2019年09月26日
アゲハの気持ち
2019年09月13日
原爆について
2019年09月05日
BRHメールマガジン vol.363 新着情報
2019年08月28日
この夏一番元気だったものは？

最新のご意見
2019年09月27日
RE:アゲハの気持ち
2019年09月25日
アゲハの気持ち
2019年09月09日
原爆について
2019年09月05日
BRHメールマガジン vol.363 新着情報
2019年08月23日
この夏一番元気だったものは？

過去の書き込み
2019年 10月 GO

新着情報

10月19日生命誌オープンラボ (19.10.01)
10月4、5日 生命誌を考える映画鑑賞会(19.10.01)
昆虫脳の標本展示が登場！(19.10.01)
パラパラめくる生命誌3ダウンロード開始(19.10.01)
あくあぴあ芥川とスタンプラリー開催 (19.10.01)

あったら入ろう…と素直に諦め、未だに入ってないのですが（別に全然惜しいと思いませんが）…何の脈絡か…手元に『ニンジャスレイヤー』という娯楽小説の、未だ読んでないキョート編があって、強大な武力を誇った忍者たちが金閣寺で炎上？・集団自決する、という予告が述べられていて（しかもキョートが共和国になっていてネオサイタマの北に位置しているようで…）、それだったら、金閣より奥州藤原氏の中尊寺金色堂の方がサマになっているのに…つわものどもが夢のあと、と雰囲気もぴったりだし（不遜ですけど）などと、また、その名もアルケオキョート、とかにしていれば…存在したかわからない影法師、亡霊の話になってしまいますか…
…いずれにしても今は昔の都に関する幻想…

季刊「生命誌」

写し…写され…

投稿日：2014.10.26 **ニックネーム：**hon no mushi

…引用が長くなりますがどうぞご容赦下さい…

…（『アララギ』歌人島木赤彦の死に臨んで…）写生といつても単に物の表面を写すことではない、生を以て生を写すことである。写すといへば既にそこに間隙がある、真の写生は生自身の言表でなければならぬ、否生が生自身の姿を見ることでなければならぬ。我々の身体は我々の生命の表現である、泣く所笑う所、一に潜める生命の表現ならざるはない。表現とは自己が自己の姿を見ることである。十七字の俳句、三十一文字の短歌も物自身の有つ真の生命の表現に外ならない…

…（斉藤茂吉の言葉…）刻々に変化し、刹那刹那に流動することを掴むなどといふのは、写生主義者の誤魔化だなどといふ人もあるが、それは理論で、実際的の観入の作用はその刻々に変化してゐる中から実相を捉へてゐるのである。本質の諦観を実行してゐるのである。…継起するものはその儘継起流行するやうに観入表現することもあり、或はその一瞬の状態のみを表現してその全体を暗指することもあり、いよいよ実行となると、千変万化するといふことになる。そのために観入の修練を云々するのであつて、写生の先づ第一の大切な事柄なのである…
　観入はつまりは実相、本質、総体、骨髄、核心に到りつくのであるから、対象に対する態度は平等無私であるべきである。
（…なお、茂吉は自分の造語「実相観入」…にこだわって…この用語の文献学的正当化を試みているが、その中で「観入」の語がドイツ語の
Anschauung（観察、直観）やHineinschauen（覗きこみ、観入）からヒントを得たものであることを述べている…）

…赤彦においても茂吉においても、そしてひいては西田の認識論にとっても「写生」はたんなる対象のスケッチではない。写されるのは文字通り「生」なのであって、そこに観入しえたとき主客の別は消滅するのである…

季刊「生命誌」

情…と、ますます冷たく見えてくる道理

投稿日：2014.10.26 **ニックネーム：**hon no mushi

何かに引きずられるようで筆が重いですが引用の続きを…悪しからず…

…更にシュライエルマッヘルがスピノザと併べて尊敬した詩人ノヴァーリスに至つては、すべての物が詩の中に溶解せられ、すべての物が情（ゲミュート）である、情は光が万物を照してその色を現はすが如くに万物を照すのである。ハインリッヒ・フォン・オフターディンゲンが憧憬の対象として求めた「青き花」は此の如き世界に於て見出されるのである。ハインリッヒは長き旅に於てすべての現世的なものを体験して後、此の如き情の故郷に還つたのである…
…現代のロマンチシズムは自然科学の煉獄を経たロマンチシズムである、自然主義や実証主義の徹底から出た理想主義である。古きロマンチストは抒情詩を歌うた、新しいロマンチストはドラマチストとならねばならぬ。十分に種々の知識の個性が発揮せられると共に、之を統一するものがなければならぬ…

…姑く心理的現象につきて見るに、吾人が通常「自己」として知るものは、知らるゝ「自己」、所覚の「自己」、自覚の対境として客観に置かるゝ「自己」、意識の光もて照らさるゝ謂ふところ識閾上の「自己」のみ。知る「自己」、能覚の「自己」、自覚の対境としての自己を客観に投置して之れを自覚

する自己、Self-distinguishing Subject,Self-conscious Subject.〔自己識別的主観、自己意識的主観〕としての「自己」、意識の光圏中に立つ自己を打眺むる「自己」、この一面の「自己」は竟に吾人の知る能はざるものに属せり…

…歴史事実とは、嘗て或る出来事が在つたといふだけでは足りぬ、今もなほその出来事が在る事が感じられなければ仕方がない。母親は、それをよく知つてゐる筈です。母親にとつて、歴史事実とは、子供の死ではなく、寧ろ死んだ子供を意味すると言へませう。…死んだ子供を、今もなほ愛してゐるからこそ、子供が死んだといふ事実が在るのだ…

季刊「生命誌」

「表現」は「標的」になるということ…に自覚があったかどうか

投稿日：2014.10.25 **ニックネーム：**hon no mushi

ゲーテは偉大過ぎて敬遠していたので石原さんの回は素通りしてしまっていたのですが、昨日初めて拝読し、やはり人のつながりの網の目が尋常ではないと感じました。
ところで（同様に敬遠していた）哲学者を扱った『西田幾多郎の憂鬱』が開かずに置いてあったのですが、何かの弾みで読み始めると、ゲーテの詩が載っていたり、鈴木大拙やら泉鏡花やらともつながりがあったようで…

対談の中で、ゲーテは見ることは大好きだったけれども、見られることは嫌い、とありましたが、これは生き物の本質を突いている所だと思います。上の本には〈…その「奇怪」とまで評される表現の晦渋さに比して、西田の思想は思いのほか直截的であり、ナイーヴである。言い換えれば、一点を凝視して目を離さない剛直さをもっている。その凝視の焦点に「人生」が位置していた。しかも彼自身の具体的で一回的な人生が…〉とありましたが、もし、ゲーテが、色々な他人の物色するような目つきで自分自身を眺めるやり方を透徹していたら…自分の中を掘り下げ突き抜けていって、完璧に男女の性差を超越した表現者になりえたかも…（漫画家手塚治虫さんの表現も類をみない位魅力的ですが、女性に甘い所がある…）…読者からの手紙を気にしている可愛らしさがその証拠でしょう…

しかし西田先生も、お姉さんの影響を色濃く受けていたんですね…自分を理解してくれる次姉、そして決定的な影響力を持った長姉…時代背景と併せて、というか激動の時代に生きた家族の物語が覗えます…そして圧倒的な支えとなった母への思慕が感じられる文章が載っていてそれを引用します…

野も山も深き雪に鎖されて、荒れ狂ふ木枯の音のみ聞く、長き冬の夜は言ふまでもなく、小春といはるる秋の日も鉛色の雲重く垂れて、地平線上入日の光赤暗く、「我を通つて悲の都に入る」と題せる死の国の入口をも思ひ出でらるるのであるが、私は此上なく此故郷を懐しく思ふ…

その他

楽しい峠越え、と、戦慄すべき峠越え

投稿日：2014.10.23 **ニックネーム：**hon no mushi

先日、ぽしゃぽしゃと冷たい雨が降る中、栃木を抜けて白河から猪苗代湖と磐梯山を右手に見える道を進み（霧が立ち込めて湖が少し…しか見えませんでしたが）、会津を通って喜多方へ進み、峠道に代わるバイパストンネルを抜けて米沢へ下り、かみのやま温泉から山形まで行って迂回して、山を越えて白石から福島、郡山…と高速道を使わず一周してきたのですが（今も肩が凝っていて…）ふと思いついたことがありますので、憚りながら申し上げます…

喜多方から米沢に抜けるには、飯豊（いいで）連峰から磐梯山にかかる峻険な山道を越えなければならず、昔の人は苦労しただろうなと（これは想像ですが）、でもトンネルを出た時道路を横断したサル…にとってはそれほどでも…？とか、しかしその峠越えの大変さを強く感じたのは、山形県庁辺りから宮城に抜ける笹谷峠を越える際…
山肌に張り付いた九十九（つづら）折の細い道を時速10km位で登って…脇は霧深い断崖、ここで地震が起きたら終わりかと…紅葉を見るより道を外さないよう…そして峠に着くと石碑があって、茂吉の

　ふた國の

生きのたづきの
あひかよふ
この峠路を
愛しむわれは

という歌が刻んであって、下が全く見えない霧の海を目にし何故か（UNDERGROUNDに当てた〈阿弥陀御覧雲覘土・カンダタ愚弄運動〉を〈黄泉平坂とおりませ・チビキノイワをくぐりませ〉とどこかで聞いたのと重ね合せて）変なことが頭の中に、それは…
今回のルートに近い道で山越えして後ろから攻められると、仙台の青葉城のような城も陥ちるのでは…と、そこで、ハンニバルとナポレオン、そして彼に会ったことのあるというゲーテ（ゴェテ？）とメンデルスゾーンのことを山越しついでに思い出しました（何故か一緒に出てきたのですが、音楽家のことについては（モーツァルト同様、父親以上に）そのお姉さんの影響が大きかったか…）

中村桂子の「ちょっと一言」

類人猿・狩猟民（古代人）・現代人

投稿日：2014.10.20 **ニックネーム：**hon no mushi

誠に勝手ですが流れの続きで、読み終わった山極さんの本から…

〈類人猿に見られる愛〉
…人間の間主観性に通じる心の働き…他個体の欲求を自己の欲求と同じレベルで感じ、食物の一部を与えることによって交渉の継続を了解する…

〈戦争は狩猟の延長ではない〉
…なぜ人間だけに、狩られたのではなく、狩ることによって進化したという、他の霊長類とは違う解釈を当てはめるのか。ハートとサスマンは、それがキリスト教由来の考え方だと指摘する。神の恩恵を失い、原罪を背負った人間は捕食者としての本能を脳の拡大によって発揮し…狩猟を発達させ…不可避的に現代の戦争へ…

〈狩猟民の生活〉
…人間は食物を用いて親しさも、敵意もしめすことができる。しかし、それが勝手に行われれば、人間関係は混乱し、嫉妬や憎悪が渦巻いて社会は不安定になる。だから、どの社会でも食物の分配には細かなルールやエチケットが課せられ…狩猟採集民はその影響を極度に抑えた社会を作ったといえる。…本来所有の難しい性の相手を互酬性に基づく交換に用いて、その所有を共同体によって合意し、所有の生じやすい食を徹底的に分かち合うことによって葛藤を抑えた…だいたい150人程度の居住集団…

〈死んでしまった世代や起源への問が…〉
…祖先を同じくすることによって、親族の規模は拡大され…その究極の形が民族という概念…民族には必ず始祖神話が存在し、それが語り継がれてアイデンティティの核となって…小さな共同体の内部でのみ用いられていた分かち合いの精神が、民族の理念として利用され…家族を守るために戦っていた男たちが、同じ精神をもって民族のために戦うことを要求される。食の共同と性のルールによって生まれた愛と奉仕の心は、その力が及ばない領域を支配する者たちによってすりかえられ、戦争へと駆り立てられるのである…

先の『ファントム…』の当て字は「不安吐夢・滅相…宮」かも…

その他

愛（フィリア）が間に挿んであった…

投稿日：2014.10.19 **ニックネーム：**hon no mushi

…本棚を整理していたら、先日までの一連の投稿に関わる、エピソードにあふれた本が出てきて…少し引用します…

ディオゲネス…彼は「祖国を奪われ、国もなく、家もない者、日々の糧を物乞いしてさすらい歩く人間」であった。すなわち、彼はアリストテレスのいう「国を亡くした人」であり、「竈なき者」（＝家なき者）であり、「将棋における離れ駒のように孤立した者」（＝「クセノス」）であり、「共同することのできない者」（＝「異人」）であった。そして、おまけに彼は「自足」を自らの信条として生きた「犬」（＝アリストテレスのいう意味での「獣」…動物

学的に規定しえない…雑草・雑魚・雑種のようなもの）であった。こうして見ると、ディオゲネスはアリストテレスが自分の「国」から排除しようとした者がもつあらゆる属性を過不足なく体現している、一個の典型的な存在だった……「ポリスのいかなる部分でもない」者として…こういう輩を一括して追放しなければならない彼なりの理由…あまりに人口が多いと外国人やメトイコイ（在留外国人）が発覚されないまま容易に都市国家の中枢部分に侵入してきて市民権に与るといったことが起こりがちだが、これは望ましいことではない…
それにしても奇妙なのは、いつのまに…「難民」…等が「獣」に置き換えられることになってしまったのか。「獣」はどこまでも「獣」であって、「国なき者」とか「家なき者」といった「人間」ではないのではないか。何故、「獣」の話が、突然、「人間」の話にすり替わったのか。
アリストテレスによれば、「国なき者」とか「家なき者」とかは、〈その本性において〉、「獣」に〈等しい〉存在だったからだ…
しかし…〈その本性において「獣」〉なる者が、はたしてこの自然界に存在するかどうか…
『政治学』…には…「…自然は…[家畜や野生動物]を、人間のためにこそ創ってくれた……獣どもや、支配されるべく生まれついている（ノモス（法、人為）のうえの、でなくフュシスのうえの）人間どもに対して…戦争は〈本性的に正しい〉…」

…『哲学者ディオゲネス』…の、ポリス的動物と「獣」のアナロギア、より…

中村桂子の「ちょっと一言」

遠く深く、隔たった世界から

投稿日：2014.10.18 **ニックネーム：**hon no mushi

…先程の話で書き忘れたことを考えながら、山極先生の本を読み進めている内に、変なことに気付きましたので、本当に大迷惑かもしれませんが、申し上げます…

…地中海の話を出しましたが…すぐそばに琵琶湖があったのですね…

そこでふと想ったのが、逢坂の関辺りをぶっこわせば（小泉元首相ではないですが）、京都と奈良は大洪水ですね。紫香楽の宮や伊賀や甲賀の里はぎりぎり大丈夫という所でしょうか。いかなる天変地異が起こるか分からないのがこの国ですが、それを想定してつくった訳ではないでしょうけれど、そんな所に住まえば、上方から山人の土人と蔑まれるでしょう…
…そこで、聖書の話をふと思い返しました。…旧約聖書はアダムから始まり、ノアの一族が唯一生き残って、子孫を繁栄させていく、イスラエルという国造りの話で、確固たる自民族の仲間内意識にあふれたテリトリー取りの物語…新約聖書はその仲間内から現れたイエスという男が、「テリトリーなど関係ない、私の言葉を全世界に共通する法として信じて頂けるなら、あなたたちは救われるだろう」という、法の、（食糧を安定して調達してくれ、子供を家族以上の連帯組織で育て上げてくれる）国家に対する超越性を説いて、新しい仲間を獲得していく話なのだと思います。
そして、先に述べたシナリオで水の底に沈む側と「それ以前（架空の話なので）」に仲間外れにされていた部外者達の関係は、旧約聖書のノアの洪水の話に近い…要するに、当時の国造りに協力的な者は京都や奈良側、朝廷・政権側に重宝され、反抗したり渋ったりした者は、徹底して嫌われ、国造りの「史誌」には載せてもらえない…
…そう、国造り、都造りの話なのです…そして、逢坂の関をぶち壊せるほどの者は、この国にとって脅威そのものであって…

国が動く、人が動くということがどういうことなのか、遠野から京都を見るように、また霊長類全体からヒトを見るように、ちょっと想像してみただけです…

その他

『ファントム・メソポタミア』

投稿日：2014.10.18 **ニックネーム：**hon no mushi

締まりのない話ばかりでごめんなさい…
科学では推し量れないような夢の話を投稿しましたが、最近の沙漠関連のもののタイトルがふと思い浮かんだのでお伝えします…
…「ファントム・メソポタミア（幻影・滅相法多宮）」です…当て字も変なタイトルですが…

関係あるのかどうかわかりませんが、笙野頼子さんがどこかの小説で「海底八幡宮」というのを描いていたかと思われますが…もし、ポンポン山？・地獄谷峠と、京都・奈良・大阪の境、を結ぶ線が千曳の岩のようなもので閉じていたら、今頃、京都・奈良は湖の底でしたね…ジブラルタル海峡が開いていなければ地中海ができていなかったのとは反対に…石清水八幡宮辺りがちょうどネックになっていて黄泉平坂の入り口みたいな感じだったかも…
…でも、これだけで物語がひとつ出来そうです…

その他

先日のは「洞下異種構成」だったのかも…

投稿日：2014.10.17 **ニックネーム：**hon no mushi

鳥獣戯画絵巻を有している高山寺の明恵上人は40年間夢の記録を付け続けたとありましたが、私も一昨日から二晩続けて変な夢を…、それを僭越ながら…

第一日目は、森の中にそびえる、樹冠に届く程の高楼の最上階から始まり、そこはほとんど全て木造で周りは明るく日差しがあって、欄干が付いた回廊が6畳間二つを取り囲んでいるのですが、なぜかトイレがなく、怖くなって下に降りていくと、下の方からガヤガヤと人が上がってきて（一階は更ににぎやかで）しかも一階にだけトイレが…それらも全て旧式の、あるいは肥溜めに板を張ったような感じのもので…
そして昨晩のものは…
沙漠の中に大きな河の気配がある、猥雑だけれど大変賑やかな人込みから始まり、空気は埃っぽく乾いているようで湿気を含んでじっとりしていて、そこに雑踏が加わり黄色くむんむんと霞んでいる感じで、ダウンタウンのような所に入り込もうかという時に道路が冠水し始め、そういえば人けもなくなってきていたのでと探しているうちに、だだっ広い校庭のような所にたくさん人が集まっていて、何千人かの単位ごとに整列しているのを、俯瞰するような高所からの視点で見て…
…それが物凄い壮観なのです。真ん中の演説台を中心にして数が…十万以上いるのがわかって、何故かみんなコケシのような姿形をしていて…よく見ると、白っぽいコケシと青っぽいコケシがペアになって一個体のようになって並んでいて…突然、竜巻のような突風が野分のように人込みをかき分けていき、皆それを受けてなびくのですが、果たして例えば白い方が倒れたり潰れたりすると、その分、隣りの青いのが膨らんで…まるで地中で一個の風船が繋がっていて、その内を埋めているものがうつっていっているような…また、つるりとした丸顔が少しくびれてオカメのように雪だるま風にふくよかになったりと…

中村桂子の「ちょっと一言」

ゲーテ会で・・「サル化」する人間社会

投稿日：2014.10.15 **ニックネーム：**teru

９月８日　国際高等研究所でのゲーテ会は、１０月に京大学長になられた山極寿一先生の「サル化する人間社会」出版記念も兼ねて講演されました。
・なぜゴリラを研究するか
・ゴリラの魅力
・ゴリラの同性愛
・家族の起源を探る
・なぜゴリラは歌うのか
・言語以前のコミニュケーションと社会性の進化
・「サル化」する人間社会
聞いてから、先生に高槻市の生命誌館のことをメールしました。
是非、行ってみたいと書かれてました。
次のゲーテ会には大学の国際化を語られると思います。

お返事

投稿日：2014.10.15 **名前：**中村桂子館長

山極さんお忙しくなられるでしょう。きっとすばらしい京大になるという期待が大きいですね。一方でゴリラの山極さんとしての面も大切になさっていただきたいと皆が願っています。外野は勝手ですから。でも両方をなさる活力は充分。期待しましょう。

中村桂子の「ちょっと一言」

私の宝物

投稿日：2014.10.15 **ニックネーム：**J.H.

「感激のこどもたち」というご意見を読ませていただいて、その時のお子様たちの喜びが目に浮かびました。実は、私も同じような経験をしたからです。

先生のことは以前から存じ上げておりましたが、15年くらい前先生が出演されていた「人間講座」というテレビを拝見し、思わずファンレターに近いようなお手紙を出しました。すると、思いもよらなかったことですが、先生からお葉書をいただきました。そのときの驚きと喜び・・・。今も大切な宝物です。

以前から、生き物に興味があった私です。自然と子育てにおいても親子でいろんな生き物に触れたり育てたりしました。その延長でしょうか、今、子供は生命の発生のメカニズムの研究に携わっています。
先生の、目には見えないお力を感じています。

先生からお返事を受け取ったお子様たちにも、そのときの喜びと感激が、私と同じように深く心に刻まれ、生命の不思議、大切さに気付かされることと思います。
先生の分け隔てないお心に深く感謝しています。

お返事

投稿日：2014.10.15 **名前：**中村桂子館長

先日、手紙を出した子どもたちからまた手紙が来ました。写真入りで。天草の小学生です。そこでまた手紙を・・・「ヤギさんゆうびん」になりそうですが、元気な子どもとのやりとりは楽しいです。

その他

「同化異種形成」…とつぶやくのが聞こえた

投稿日：2014.10.15 **ニックネーム：**hon no mushi

顰蹙を買うのは十分承知で…昨晩、真に迫るような夢を見まして、他愛ない話ですが、記憶が薄れる前にお伝えしたく存じます。ご参考までに…

…体育館以上の広さと相当の高さの天井があり、その一角からは外の様子が窺える簡素な巨大展示場のような、カンファレンスホール風の大きな部屋の真ん中あたりに、パイプ椅子が３０くらい置いてあって、普通に見える人たちが着席しているのですが、中はぼんやりと薄暗く、外は薄曇りの中にたまに明るみが差したり、あるいは黒雲が立ち込めている中にピカッと稲光りが明るく照らしたり、といった感じで明暗が入れ替わっている…そして皆さん何かを待っている様子なのですが、かなりじらされても何も起きません。…で、私のそばの人たちがせっつき合って貴賓席の様な所に行ってみると、光が当たらない壁際の暗がりから、もそっと何者かが動き出し、服を着ているので人間だとわかるのですが、なんだかその場の雰囲気が自然界の一部の異空間のような感じで、とても大きな体で膨れたお腹を突き出してじりじりと進んでくるのです。あまりにお腹廻りが大きいので、足も見えず、頭も見る側からは隠れてしまっていて…あえて形容するならば、巨大イソギンチャクが服を着て歩いているような感じなのです…
そしてその者が貴賓席にたどり着くと、そこにはお医者さんらしき方が既に着席していて、必ずしも声は大きくないけれど全員に聞き取れるテレパシーのような明瞭な声で、「同化異種形成」…と云うのが聞こえてきて、なぜだかはっきりとその言葉だけは、夢から覚めても耳に残っているのです…
そして、その診断が下されたあと、隣に座っていた一見普通の中国人らしいぽっちゃりした、表情の落ち着いた男の子が、ボクもそうだよ…と、こちらを振向いて穏やかに口にしたのですが、ここで夢は途切れてしまい…

…でも、どちらが現実なのかわからないぐらいリアルな夢でした…

中村桂子の「ちょっと一言」

認めたくないけれど…この世界では表裏一体だった平和と戦争

投稿日：2014.10.14 **ニックネーム：**hon no mushi

…台風が来る前に自宅近くで見つけた、外傷のない様子で死んでいた幼いシマヘビをずっと観察していたら、虫が少しも寄ってこないのが不思議で…普通はハエやアリがたかってくるのに…。それはそれとして（遠野物語はじっくりいきますが）そばにあった山極寿一さんの『暴力はどこからきたか』を何気なく開いて冒頭に目を通すと…衝撃的な文章があり…連続投稿で恐縮ですが引用致します…

…長年アフリカでゴリラの調査をしている関係上、紛争地…の内戦では、肌で戦いを感じる機会が何度かあった。街に残るすさまじい破壊の跡、道端に放置されて腐臭を放つ人々の死体、絶え間なく聞こえてくる銃声、不安な目をして固まりあう人々。何より私が衝撃を覚えたのは、ルワンダの紛争で難民となって逃れてきた人々の表情だった。…みな裸足で、毛布や食器などわずかな荷物を頭に載せ、不気味なほど押し黙って歩いていた。人々の顔は冷たく、完璧なほど無表情だった。子どもたちは親の手を握り、夫婦と思われる男女が寄りそって歩いているのに、子どもの泣き声も、笑い声も聞こえなかった。深い闇の底から浮かび上がった亡霊たちが、列をなして行進しているように見えた…

…内戦で…調査基地が略奪にあったりした。そんなさなかに出会った少年兵の表情が私は忘れられない。…ふだんなら学校へいって仲間たちと楽しく過ごしているはずの少年たちが、なぜこんな場所にいるのか。彼らは決して強制されて戦地に来たわけではない。私はどうしてもその理由を知りたくなった。なぜこの戦闘に加わったのかと問う私に、彼らは燃えた目を向け、家族を殺されたからだと答えた。
　そのとき私は、ああ、ここに戦いの原点がある、と感じたものだ。戦いは究極の破壊であると同時に、究極の愛の表現でもあるのだ。戦いで傷つき、死んでいく人々の恐怖や苦痛を、人間なら誰でも感じることができる。残された遺族の悲しみや喪失感の大きさも理解できる…ために、参戦するという動機が正当化され…それが家族への愛をしめす最大の方法とみなされるからである…

その他

京都から、ふと、想像して

投稿日：2014.10.12 **ニックネーム：**hon no mushi

何気なく『遠野物語remix』（角川ソフィア文庫）を開いてみて（先に挙げた『犬身』を読み終わり…そこで「二空」と申しましたが、身体あっての魂、というか両方やはり必要なので、「肉有」「二宮」というのもありかと…）…初めに引っ掛かる所があったのでお伝え致します。

…初めて訪れる者は、一様に驚くだろう。
遠野町は、山奥にあるとは思えない程に繁華な街なのである。
それでいて、周囲は深く険しい山なのである。ちょっとした山中異界の様相を呈していると言っても良いかもしれない。
…伝え聞くところによれば、遠野郷一帯は、大昔は湖だったそうである。
盆地一円に湖水が湛えられていた―ということなのだろう。
その盆に溜まった水が、ある時何かの理由で人里に流れ出た。
水位が下がり、やがて湖底は露わになって、そこにいつの頃からか人が住み始め、自然に集落ができた。
…俗に、遠野には七内八崎（ななないやさき）ありと謂う。…内とは、奥州辺りの地名では能く耳にするものだが、これは沢や谷のことである。崎とは、湖にせり出した半島のことなのだ。
つまり、そうした名称は、湖だった頃の残滓なのである。まだ人の住む前の土地の記憶が、地名として残っているのだ。
遠野とは、そんな処である。

…東北地方では一族のことを洞（ほら）と呼ぶ。もしかしたら大同とは、大きな洞の意なのかもしれない…

…早池峰山は御影石の採れる山である。
この山の小国村に向かう側に、安倍が城という名の岩がある。
安倍が城の名は、前九年の役に於いて厨川の柵で討たれて死んだ平安時代の武将、安倍貞任に由来するものである。ただ―そこに城があったとは思えない。
それは険しい崖の中程にある大岩であり、とても人が行き着けるような処ではないのである。
しかし、この岩はただの大石ではなく窟（いわや）になっていて、今も尚、安倍貞任の母が住んでいるという言い伝えがある。
雨のそぼ降る夕暮れなどには、窟の扉を鎖す音が聞こえるという。

（…そこで思い出したのは…チビキノイワ…）

…その山々の奥には、山人（やまびと）が棲んでいる。
山人は、人に似た姿形をしている。
でも、人ではないという…

その他

自然の中ではぐくまれ、拠りどころをもつ、心と身体

投稿日：2014.10.10 **ニックネーム：**hon no mushi

また台風の気配が強まっていますが…
自然域との「壁」の築き方は、もともと縄文時代以前の日本では、農耕が普及する前の狩猟採集の段階だったようで、自然とのつながり方、へだて方もそれ以降ほどはっきり分かれていなかったはず…あと、武士が台頭してきて街ごと焼き払われたり飢饉になって山に食糧を求めて入り込んだりしなければ、また、戦国時代で自然の要塞や湧水の出る所などを押さえておくというのも、忍者など山村人の副業のような間諜活動で深く自然の域に分け入っていく場合もあったかもしれませんが、近現代のように杓子定規に自然を切り割りしていくのはどうも馴染めません。…京都などは井戸を掘れば水が出てくるような、四方を山に囲まれ水が集まってくる地…高槻辺りは地上部は川が流れ、地下はその大きな隠れた水瓶から出る水脈の通る所のようで…現在『犬身』という本を読んでいるのですが、興味深い表現がありましたので、ささやかながら引用致します…

（「もともと魂の半分が犬という普通ではない人間だった」という、性同一性障害ならぬ種同一性障害？の者を中心として進む物語で、犬になってからの名前はふさふさした毛並の「フサ」という名で呼ばれるのですが、私には「フサツ（不殺）」とも感じられ…犬化した者を「ニンガ（忍牙、人我）」、慕うあるじらを仮に「ニクウ（二空）」として捉えると意趣が膨らんで面白いのですが）

…夜になると梓と籠もる六畳ほどの寝室は古代の洞窟のように感じられた。眠る梓のかたわらで暗闇を見回す時フサは、梓とともに兎や雉を狩り肉を分け合って食べ、住みかの洞窟では危険な獣の接近を梓に知らせる生活を空想して憧れた。その空想の中の梓は犬だけを、さもなければ狩りの仲間として鷹も伴侶とする単独生活者で、罠をしかけるのも武器を作るのも誰の力も借りない。…フサはといえばあり得ないほどの運動能力を持つ狩りの得意な不死身の犬だった…

…という所です。…以上です…

その他

自然界が教えてくれる見えない「壁」について

投稿日：2014.10.05 **ニックネーム：**hon no mushi

先に、（人為的に築き上げるのは難しい）日本におけるバベルの塔…について投稿しましたが、台風１８号が列島を襲おうとするこの時に、頭を駈け巡るような考えが浮かんだので、書き記しておきます。悪しからず…

熱帯の海で原型を作り上げる台風は、温かい海水が蒸発してもくもくと雲が出来、上昇するにつれて冷やされ雨になって落ちてくる、ただこれだけだとスコールで終わりですが、雨で冷やされても温かい海水面に与える影響は少なく、またもくもくと雲が湧き立って…というのを繰り返すことによって、更に地球による自転やら他の風などの要素も加わって、広域に渦を巻く雲の密集形態が出来る…のだと思いますが、
以前、竜巻のメカニズムについて、平べったく横に広がる海岸線を縦にくるくるとスクロールした様なものを挙げましたけど、その時の、大部分を占める打ち寄せる方の流れを、海面の熱による上昇気流によって雲が出来る上向きの流れに、離岸流のような浜から逃げていく細いが速い流れを、雨粒になって海面に打ち付けサッと冷やす流れに置き換えてみると、規模の大小はあれど似たような構造体のような気がしてきました…

…そこで気が付いたのですが、バベルの塔、いや、バベルの水槽は人の手でこさえようとすればとんでもない労力が必要ですが、台風は、「自然に」地球と太陽がつくり上げた「空飛ぶ水がめ」だと感じました。特に地上で、特大の水槽を囲む「壁」を作るのは大変でも、自然界は難なくそれをやってのける…科学が教えてくれたのは、空飛ぶ水槽を織りなす壁が、既に自然界に存在していたということ…飽和水蒸気曲線というか、温度と圧力による水の三体・三相を分ける壁です。…それを、太陽が熱を与え、地球の条件のよい時期と場所に、そ

の三相をぐるぐるぐるぐるまたいで越える、輪のようにうつりゆく動きをつくり出す…どこか一相に入れば他の相からは消えて見えなくなり、またふっとどこからか顔を出す、これもクラインの壺の亜種のような（私にはその位相構造体はわかりかねますが）、風にも守られた空飛ぶ水壺のようなもの…

その他

アゲハチョウの幼虫にびっくり

投稿日：2014.10.04 **名前：**杉山昭夫

今日（１０月４日）、家の廊下前にある物干し場の下で、アゲハチョウの幼虫を見つけました。なんでこの時期に、この場所に・・・？そこは鉢物用のプラスチックの受け皿を重ねて置いてある場所でした。庭の隅に山椒の木が１本ありますが、もう１０月なので当然新しい芽や葉が出ているわけでもなく、全体の葉がくすんだ緑色になって冬支度をしています。幼虫の食べるものもないはずで、しかも山椒の木ではなく物干し場の下にいたのでびっくりしました。すぐ戻しましたが、最低気温が１０度を切る日すぐやってきます。幼虫が蛹になって無事に冬を越してくれるといいなあと思いました。そういえば、夏が終わってもアゲハチョウが庭を飛んでいたことは記憶にありました。それと関係あるのでしょうか。ちょっと感動した事件でした。これも生命誌研究館で研究しているアゲハチョウのことにちょっと関心を持ったおかげかもしれません。

中村桂子の「ちょっと一言」

世代を越える災害の記憶、古代人の言い伝えと神話…

投稿日：2014.10.04 **ニックネーム：**hon no mushi

昨夜月を眺めたらふっくら丸くなっていて…古代の人は、世代を越えて襲ってくるような災害を口伝にして受け継いでいたから、神話の重みが現在と違ったのかな、と思ったりしました。部族内というか社会集団内で記憶する体制を作ることによって、酒樽の中に酵母菌がこびりつくような形で、心の準備を怠りなく後の世代に引き継がせることができたのでは…

それはそれとして、夢を見るということが（全くナンセンスなものが多いですが）、現実の事象の予兆や兆し、起こりえたかもしれないことが意識に上ってくるような…まるで、ゼロからいきなり立ち上がってくる風にみえる現象を、なだらかな関数の中で捉えたときの偏微導関数のような感じ…大抵は複合三角関数の形で導関数はその前後、先駆けと後追いで同じ形をとる（かしら？）…また、深く潜って、別の種族の領域に分岐する道まで潜っていって、迂回して戻ってくるような…
と昨日、書き込もうとしたのですが（意識の偏在と散在性について、無意識のわけのわからなさについて）、またまたパソコンがダウンしてしまって…科学技術というのは科学をサポートするものではなかったのかしら…あぁ、夢は神秘の領域だからついてこれないのかな…とクスッと笑ってしまいました（大変不遜ですが…）

…でも、想像してみると面白いんですけど…潜っていって戻れなくなり、顔をぼこっと出したら、周りは亀さんばっかり、鶴さんばっかりだったり、とか…案外、疑似体験をしたそのうつりゆく道筋を追うと、神話性の物語が浮かび表れてくるのかもしれません…

中村桂子の「ちょっと一言」

現代人外の者達の気持ち

投稿日：2014.10.03 **ニックネーム：**hon no mushi

ふと変なことを考えついてしまったのですが、古代の人達は自分がいつ死ぬかについてどう考えていたのだろうと…

…医療技術の発達した現在から見ると、はるかに病気の予測は難しかったはずです。では死というのは何だろう…昔の人の死はただ心臓が止まることではない…心が動かなくなることかな？……『シンク』という本に正体不明の振動の渦が心臓で出来る現象が起きることがあって生命を侵す、とありましたが、台風が発生して進路が予測できる今と違い昔は「いきなり」暴風暴雨が襲ってきて、それで命を奪われる人もいたはずです。急に来て急に何人かが去ってゆく…。でも、生きている限り心は動き続ける…。新月を過ぎた上弦の月が夜空

を彩っていましたが、月の満ち欠けも、朝日が昇ってくるのも、生きている限り果てしなく続いてゆく…昔の人の方がそういうことに敏感だったのだと思います。

もう一つ、今度は旧約聖書の話から想い立ったのですが、日本に普通にあるダムの壁をどんどん高くしていって、周りの山にもダム湖を囲むように城壁を築いていき、天に届くほどまでそれを続けると、理論上は「中に」水を張った巨大な水槽が出来上がり…日本版「バベルの塔」…更に天高く張った水面に船を浮かべると、空中庭園の池上の「ノアの箱舟」となり…その城壁を一気に崩すと大洪水が起きて…
でもこれはどう考えても文明人の発想ですよね…

…それでも…「生きている限り」日はまた昇る…

JT生命誌研究館
〒569-1125 大阪府高槻市紫町1-1 TEL:072-681-9750（代） FAX:072-681-9743

copyright © JT Biohistory Research Hall 2012.